

普通のフランドール

ねこ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

フランドール・スカーレットは普通の吸血鬼です

2	1
7	1

目次

馬鹿と天才は紙一重。私、フランドール・スカーレットの座右の銘であるこの言葉には、様々な意味がある。

だが、私は勝手にこの言葉の意味を、こう解釈していた。あまりに天才過ぎる奴は、周りから理解されず、馬鹿にされる。

逆に、あまりにも馬鹿な奴は、言っていることが意味深に思えて、天才だと思われる、とそういう意味だと捉えていた。

暴論だとは私は思うが、あながち間違いでもない私は思っている。

だから、ごくごく平凡な吸血鬼である私は、決して馬鹿でもないし、天才でもないはずなのだ。まして、危険でもない。性格だつてごく普通。力も吸血鬼としては一般的だと思う。むしろ、弱いくらいだ。

「なのに、どうして今日も部屋にいないといけないのさ」

「それ、本気で言っているのか？」

姉のレミア・スカーレットは、困ったように肩をすくめた。

私たち吸血鬼姉妹は、紅魔館と呼ばれるヨーロッパの一角にある館に住んでいる。近所で噂になるぐらいの、仲良し姉妹だ。両親はいない。姉曰く、私たちが幼い時に修行の旅へと行ってしまったらしい。それでも、私は決して寂しくなかった。もちろん、姉の親友である魔女のパチュリーや、門番の美鈴。最近やってきたメイドの咲夜と仲がいいということもあるが、一番の理由は、やっぱり目の前にいる姉の存在だろう。

彼女は、聡明で力も強く、そして何より優しかった。今思えば、大抵のことは彼女から学んだと思う。私の翼が吸血鬼としては珍しいものと知ったのも、彼女のおかげだ。

私は、私と姉以外に吸血鬼を見たことがなかった。だから、自分の翼も一般的だと、そう思っていた。姉の翼はコウモリをそのまま大きくしたかのような、無骨で、それでいて美しいものだったが、私の翼は毛がなく、先に宝石のようなものがついている。

だが、どうやら私の翼は類を見ないほど珍しいらしかった。そう告

げられたとき、私はかなりへこんだ。ただですら吸血鬼としての力は弱いのに、姿も変だとすれば、出来損ないじゃないか、と姉に泣きついた。

「吸血鬼は別に翼で飛ぶわけじゃないから、そこまで気にすることはないわ。確かに珍しいけど、たいしたことないわよ」

優しい姉はそう慰めてくれた。今では、この翼は私の自慢だ。例えば、前歯が少し飛び出していること、髪の毛がくるくると丸まっていること、鼻がかぎ鼻になっていること、それらと同じなのだ。それは欠点ではなく、個性だ。

「あの時はあんなに優しかったのに！」

私は思わず声を荒らげる。それも仕方がないだろう。自分の家だというのに、悪いことはしていないというのに、部屋から出るなどいわれたのだ。理不尽にもほどがある。

「分かってくれ、フラン。今日は大事な日なんだよ。何かあったら、ま
ずい」

「何かって、なにさ」

「フランが部屋から出ると、毎回問題を起こすでしょ？」

さも当然かのようにそう言い切る姉に、軽くめまいを覚えた。私は問題を起こすようなキチガイでもないし、そもそもそんな力もない。

姉の水色の髪の毛が、ふわりと浮かんだ。気のせいか、視界に少し霧がかかっているようにも思える。寝不足だろうか？

「例えば、この前はパチエを失神させた」

「本で滑って頭をうっただけだよ」

「その前は壁をぶっ壊した」

「経年劣化だよ」

「そのさらに前は美鈴を」

「やってないって！」

私は思わず大声で声を遮った。いつもそうだ。私は馬鹿でも天才でもない。それなのに、どうしてこうも勘違いされるのだろうか。私の憤りに同調するように、バサバサと鳥が羽ばたく音がする。

目を丸くしている姉は、呆れたのか、私の後ろを指さし、どうい

わけか、小さく舌打ちした。

「あなたは頭がいいけど、馬鹿なのよ。そして天才でもある。自分の実力に見合った仕草を身につけなさい。それまでは部屋から出ないように」

姉は、心配そうに私の顔をのぞき込んだ。怒っていないか、と気を遣ってくれているのだろうか。当然、怒っていた。だが、心優しい姉にこれ以上迷惑をかけるのは、本意ではない。

「仕方がないから、許してあげるよ。だから、代わりに面白そうな本を持ってきて」

「あなたは本当に本が好きねえ。パチエの影響かしら？」

「違うよ。逆に、部屋にこもってできることで、読書以外にある？」

「他にも何かあるんじゃない」

「ないよ。一人でタップダンスでもすればいいの？」

姉に言われたとおりに、部屋へと戻ろうと振り返るも、思わず立ち止まってしまった。あまりの光景に、声を出すことができない。

そこには、無数のコウモリの死体と、小さなガラス片が散乱していた。いったい、何があったのか。混乱で頭が壊れそうになる。

私の後ろをずっと見ていた姉ならば分かるのではないか。そう思い、もう一度彼女に視線を戻す。こんな突飛な光景を目にしていたにもかかわらず、姉の顔に動揺はなかった。いつものような、自信満々で頼もしい面持ちだ。どうしてそこまで反応が薄いのだろうか。

「私の後ろを見たのに、どうしてそんだけなの？」

私がそう聞いた途端、その強気だった姉の顔は、ひどく情けないものとなった。なぜだ。

悪魔の子。彼女はまさしくその言葉にふさわしかった。

そもそも、私たち吸血鬼は皆、悪魔の子といえるかもしれないが、その子は、フランドール・スカーレットは、群を抜いていた。

私の両親は、生まれてきた彼女の姿を見て、絶望的なまでに美しい彼女の翼を見て、逃げた。逃げたというのは、この館からではない。この世から逃げたのだ。手段は絶対に言わない。思い出すことすら憚られる。

親がいなくなったことに対する悲しみはあった。妹を恨む気持ちもあった。だが、それもすぐに消え去る。たった一人のかわいい妹。愛おしくないはずがない。

そんな妹に、親の死因を言えるはずがなかった。未だに誤魔化してはいるが、賢いあの子のことだろう。きつと、すでに真実にたどり着いているに違いない。

そう。私の妹は賢い。だが、同時に馬鹿だ。二手三手先を見るとは言うが、その先が遠すぎて、私たちには理解できない。そんな彼女のなす事に、私たちは冷や冷やさせられていた。

だから、彼女にはできるだけ自室にいてもらいたいのだ。まあ、さすがにずつとと言うわけでもないし、強制するつもりもない。愛しの妹に、軟禁のようなことなんて、できるわけもなかった。

「分かってくれ、フラン。今日は大事な日なんだよ。何かあったら、ま
ずい」

何かって、なにさ、と口を尖らせる彼女をなだめる。何かとはなにか。それは単純だった。

今日は、引っ越しの日なのだ。それも、ただの引っ越しではない。館ごと、幻想郷という場所に引っ越すのだ。そこは、日本にある、妖怪の楽園と呼ばれているものらしい。

そこを支配することができれば、しばらくは困らないだろう。何にか。このおてんば妹の遊び相手だ。彼女ほどの力と対等に戦えるものを探して、私は引っ越しを決意した。

その引っ越しを邪魔するようなことは、いくら妹とはいえ、勘弁してほしかった。

だが、フランはどうやら納得がいていないようだった。しぶしぶ、最終手段を使う。とはいってももの、そこまで複雑ではない。実力行使だ。

「例えば、この前はパチエを失神させた」

適当に言葉を並べながら、時間を稼ぐ。口から泡を吐く七曜の魔女の姿が脳裏に浮かんだが、かき消した。意識をフランの後ろへと集中させる。

私は吸血鬼だ。コウモリに変身するのだって、たいしたことではない。だが、私はそれ以上の技術を手に入れていた。

予め霧状に変化させていた髪の毛を、その場でコウモリに変化させることができるようになったのだ。しかも、感覚をも共有できる。

フランの後ろに漂っていた霧が、あつという間に無数のコウモリへと姿が変わる。すると、頭の片隅に、映像が浮かんだ。フランの背中と、私の姿が見える。たくさんのコウモリを、音もなく彼女の後ろに近づかせ、一斉に超音波を出させる。いくら吸血鬼といえど、さすがに気絶するはずだ。

内心で予定通りことが進んでいることに満足しつつ、言葉を重ねる。

「そのさらに前は美鈴を」

「やってないって！」

あと少し、というところで、突然フランが叫んだ。ぎよつとしたが、焦ることもない。そう思っていた。

だが、状況は一転した。叫び声のせいか、それとも何かしら細工をしたのか、窓ガラスの一部が音もなく割れた。粉々になり、小さく分裂したそれが、猛烈な早さでこちらへ向かってくる。私たちは、たかがガラス片にぶつかったところで、どうってことはない。

だが、コウモリは別だ。

急いで回避しようとするも、まるでその動きを読んでいるかのようにガラス片が近づいてくる。たかが小さなガラスのかけら。それにも関わらず、パチエの追尾弾のように接近してくるそれに、私は対処することができなかった。

一瞬でコウモリは全滅した。それぞれの頸動脈を、すべて突き刺されてしまっている。たかが、小さなガラスで、だ。

戦慄した。怖かった。口は勝手に動くが、何を言っているかは分からない。声の振動によって窓ガラスを割り、その破片を、死角から襲いかかってくる無数のコウモリの頸動脈めがけて突き刺すだなんて、普通に考えればあり得ない。だが、私の妹は普通でなかった。

妹に恐怖した。思わず、彼女の顔をまじまじと見てしまう。私は心配だった。彼女が私の思考をすべて読み、それで次の行動をしているのではないか。無様な姉だと、見限られたのではないか。そう思った。思わず、舌打ちが出る。

だから、「仕方がないから、許してあげるよ」と言われたとき、私は心底安心した。

後は、最近パチエの図書館から本を借りているという彼女らしく、本を注文してきた妹に相づちを打ち、笑った。きつと、難しい魔道書を読むに違いない。どれだけ力を欲するのだろうか。恐ろしいが、誇らしい。

私に背を向け、去ろうとしている妹に小さく手を振る、と彼女はいきなり振り返った。その顔は、いつにもまして青白く、表情がない。金色の短い髪が、私を非難するように揺れた。

「私の後ろを見たのに、どうしてそんだけなの？」

背筋が凍った。ばれていた。彼女を後ろから奇襲したことなど、お見通しだったのだ。コウモリ程度では、彼女にとっては次第点にもならないらしい。

sonだけ。彼女は確かにそういった。やはり、私は彼女に失望されてしまったのだろうか。だが、それも悪くない。彼女の末恐ろしさからすれば、私がちんけな存在であることは事実だからだ。

姉と別れた私は、廊下を歩いていった。私の部屋へと続く廊下ではない。図書館まで続いている廊下だ。

姉の、部屋で待機している、という言いつけを無視するつもりはなかった。だが、先にパチュリーから、本を借りておきたかったのだ。一応姉にも頼んでおいたけれど、やはり自分で本を選ぶのも楽しい。それぐらいなら、許されるはずだ。

長い廊下は不自然に天井が高く、道幅も広がった。かつては無かった窓も、いつの間にか取り付けられている。私たち吸血鬼には日光は毒であったが、高いところにある窓からは、直接日の光が廊下に降り注がないようになっていた。

しばらくまっすぐ進んでいると、大きな扉が見えてきた。私の小さな身長では届かないような高い位置にドアノブがある。

だが、あのドアノブを使って入るような礼儀正しい存在は、この館には、メイドの咲夜しかないだろう。

「でも、たまには私も礼儀正しくしないとね」

宙を飛び、ドアノブに手をかける。それにぶら下がってみると、くるとドアノブが回転した。

足をぶらぶらと揺らし、体重を扉へとかける。ブランコのように勢いをつけ、ドアノブを持ったまま扉を蹴飛ばすと、思ったよりも勢いよく開いた。

ただ、勢いよく開きすぎた。内側に急に開いたせいで、体が独楽のように回転し、振り回される。ドアノブを中心に、半円を描いた体勢を整えようとするも、途中で手がドアノブから離れた。

図書館の中へと、吹き飛ばされていく。巨大な本棚が視界に映り、すぐに消えていった。そして赤色の絨毯が急に目の前に現われる。

「あつぷないー」

平衡感覚が定まらないまま、闇雲に体を動かし、なんとか顔面で床に着地するのを阻止する。きつと、今の私の体勢は、なんともみつともないことになっているだろう。それこそ、体がねじれた蛙のよう

に。

その、無様な蛙の格好のまま、ふよふよと漂い、先へと進む。目はいまだくるくると回っていて、まっすぐ進めなかった。それでも、なんとなく見えるパチュリーの元へと向かう。

「なにやってんのよ」

焦っているのか、いつも落ち着いている彼女にしては珍しく、声が強ばっていた。

「危ないじゃない」

「一応吸血鬼だから、こんくらい大丈夫だよ」

子供ではないのだから、たかが顔面を床に打ち付けただけで、泣いたりはしない。

曖昧だった視界も、だんだんと落ち着いてくる。声がした方を見ると、そこにはこの図書館の司書である、パチュリー。人呼んで、七曜の魔女の姿があった。

「普通の吸血鬼なら、大丈夫とはいえないでしょうね」

「そんなに変な動きしてた?」

「この世の動きとは思えないほどね」

「でも、私は普通の吸血鬼だよ」

はあ、と彼女は不健康そうな土気色の顔を、さらに薄黒くした。紫色の長い髪の毛と、その眠そうに垂れた目が、より病弱さを助長している。

パジャマのようなその姿は、本気でいつでも眠れるように準備しているのだと、私はそう思っている。

「それで? 急にどうしたのよ。さっきレミイが、フランをなんとかして部屋で待機させたい、と喚いていたわよ」

「こもるよ。でも暇だから、本を借りようと思って」

なるほど、と 神妙な顔つきで頷いた彼女だったが、すぐに小さく首を振った。

「でも、今は少し我慢して。忙しいのよ」

「えー、いいじゃん」

「だめよ」

にべもなく断られ、少しへこんだ。それから腹が立つてくる。一冊ぐらいいいじゃないか。

「一冊、一冊でいいからさ!」

「だめよ。もし本を借りたいのだったら」

「だったら?」

「私の帽子を脱がせてみなさい」

得意げに笑う彼女を前に、私は頬を膨らませた。そんなの、できるわけがなかった。あのパチュリー・ノーレッジに指一本触れることなど、私にはできない。彼女からしてみれば、私なんてただの雑魚だ。

「もう少し我慢してちょうだい。これからのことに集中したいの」

「これからって、何が起ころの?」

「あら? レミイから聞いていないのかしら」

そういえば、今日は大事な何かがあると言っていたような気がした。だが、ただそれだけしか知らされていない。

「いつもそうだよ。私には何も言わず、勝手に決めちゃうんだもん」

「でも、分かってるんでしょ?」

「何が? お姉ちゃんの身勝手さ?」

「まあ、そうね」

私の冗談に、ふふつと柔らかい笑みを見せた彼女は、被っていたナイトキャップを被り直した。

私のお姉ちゃんは、確かに最高だ。だが、時々突拍子もないことをしだす。私はそこも含めて彼女のが好きだ。だって、それで私たちを楽しませようとしていることは分かっているから。だが、面倒に思うときがあるのも事実だった。

「でも、まさか引越すなんて言い出すとは思わなかったけれどね」

「え?」

突然言われたその言葉に、私は面食らった。引越すする? どういうこと?」

「しかも、館ごとだなんて、前代未聞よ」

「館ごと?」

彼女の口にした言葉の意味が分からなかった。館ごと引越す？それは、一体どういう意味なのだ。まさか、この館をどこか別の場所に転移するということなのだろうか。

いや、流石にそんなことはないだろう。あまりにも奇想天外すぎる。

その時、私の頭にはつと浮かぶものがあつた。昨日読んだ小説だ。タイトルは忘れたが、なかなか面白いものだった。

主人公はなんだかんだで魔法使いの家に行つて、色々な出来事に遭遇する、というものだ。その魔法使いの家は、四本の足のようなものが生えており、それが動き出すと書いてあつた気がする。

もしかすると、ここも、同じように歩き出すのだろうか。あり得ない話はない。なんていつたて、目の前にいる彼女は、生まれもつての魔女だ。私なんかではとても太刀打ちできないほど、強く、何でもできる天才の魔女なのだ。

「楽しみだなあ」

紅魔館がとてと歩いてる姿を想像すると、自然と声がこぼれ出た。

「楽しみなの？」

少し引きつった声で、パチュリーが聞いてくる。

「私は全然楽しみじゃないのだけれど」

「えー」

ロマンだよロマン、と私は指を振る。

「想像してみてよ。世界が動くんだよ。みんなちっぽけに見えてさ。私は何もしてないのに景色が変わるんだよ？ 楽しいに決まってるよ」

「そ、そう。なら、よかつたわ」

そう言った割には、彼女の顔は歪んでいた。絶対によかつたと思つていない。

「パチュリーはインドア派だからね。たまには外に出たらどう？」

「いつも部屋にこもっているあなたに言われたくないわね」

「こもってないよ。大人しくしろつて言われてるから、しぶしぶね」

「引きコウモリってやつね」

その面白くない駄洒落に、自分でも恥ずかしくなったのか、彼女は顔を真っ赤にした。見ていて微笑ましい。これだけでもここに来たかいたがあった。

「パチユリーが恥ずかしがる姿なんて、久しぶりに見たよ」

「見ないで。忘れて」

「忘れてほしかったら」

ぐっと体を伸ばして、パチユリーを見る。眉をハの字にし、帽子で顔をあおいでいる彼女は、私をぼんやりと見つめていた。

「本を貸してよね」

あつと、呟く彼女の顔には、どういうわけか満足そうな笑みがうかんでいる。

「ついに、決行の日ね」

知らず知らずのうちに、独り言が出ていた。

私の図書館は、一見、いつものように静かで、いつものように優雅で、そしていつものように完璧だった。

だが、ある一点がいつもとは違った。この図書館には、ありとあらゆる場所に罾が仕掛けてあるのだ。

「ここまでする必要があるとは思えないのだけれど」

この声が、どうかあのやんちゃな吸血鬼に届きますように、と願う。当然姉の方だ。

「幻想郷って場所があるんだ。そこに行く」

ある日、突然そう言い出したレミイを前に、私たちは固まった。いきなり、こいつは何を言い出すのか、と呆然としたのではない。彼女が変なことを言い出すのは、別に珍しくなかった。

彼女が土下座してそう訴えてきたから、驚いたのだ。

「この館ごと、そこに転移させてくれ、頼む」

当然、私たちは断ることができなかった。理由も聞いていない。ただ、親友の頼みを聞くことは吝かではなかった。あの高飛車な彼女が、そこまでして頼んできたのだ。気合いが入った。

「でも、別にここまで警戒しなくてもいいのに」

彼女曰く、幻想郷に行けば、まず争いが起こることだった。いや、この言い方は語弊がある。こちらから、争いを仕掛けるらしいのだ。だから、もし図書館に敵が入ってきたときのことを考えて、罠を準備しておけ、とそう彼女は頼んできた。

彼女の土下座のおかげで、私は気合いが入っていた。紅魔館を幻想郷へ移動させる準備は案外簡単にできたため、余った時間で、私はその罠を仕掛けた。仕掛けまくった。

結果的に、私の図書館は、えげつない量の罠であふれていた。鼠一匹どころか、羽虫一匹逃さないだろう。現に、入ってきた使い魔は、あつという間に吹き飛ばされた。幸い、命に別状はない。

「やり過ぎてしまったかしら」

これでは、自分も祿に動くことができない、と自嘲気味に笑っていると、ぎいと聞き慣れた音がした。ドアノブが開いた音だ。慌てて扉の方を見る。

図書館が要塞化していることは、全員に連絡が行っているはずだ。それなのに入ってこようとする奴なんて、心当たりがなかった。

動揺しているうちに、勢いよく扉が開いた。そして、その陰から、それは勢いよく図書館に飛び込んでくる。

危ない！ そう叫ぼうとしたが、それは叶わなかった。叫ぶこともできず、ただ口をあんどりと開けることしかできない。もつとも、叫ぶ必要は無かったようだが。

飛び込んできたのは、フランだった。くるくると回転しながら猛烈な早さで突っ込んできた彼女は、ふらふらと、まるで自身の体がコントロールできないかのように、不規則に飛んでいた。

当然、罠は張られている。その一つ一つは強烈で、いくら吸血鬼でも、無事では済まないようなものばかりだ。敵が来れば反応する。そ

のはずだった。

だが、それはうんともすんともいわなかった。その理由を悟ったとき、私は思わずその場で拍手をしてしまった。それほどまでに、あり得ないことだった。

彼女は、罨が発動しないように、そのセンサーをよけるように体を動かしていた。

その、ほんの僅かな隙間を縫うようにして、腕を曲げ、体を伸ばし、ふらふらとこちらに近づいてくる。岩と岩との間を流れる水のように、その動きは美しかった。

羽虫ですら通さないはずだったその罨をくぐり抜けた彼女は、突然、「あつぶない！」と叫んだ。それもそうだろう。図書館に来てみれば、罨が張ってあつたら、誰でもそう思う。

ということは、彼女はこの罨のことを知らなかったのだろうか。その事実には、私はまたも驚かされる。目に見えない罨を、一瞬で見極め、そのごく僅かな弱点を正確に突いてきたというのか。恐ろしさで、背筋が凍る。

「なにやってんのよ」

その恐怖を悟られないように、慎重に言葉を発した。

「危ないじゃない」

そう言うと彼女は、手をひらひらと振り、胸を張った。まるで、大げさだな、と言わんばかりだ。

「一応吸血鬼だから、こんくらい大丈夫だよ」

たかだか普通の吸血鬼程度が、私の罨をすべてかわせるはずがなかった。あのレミイですら不可能だろう。

そんな芸当を見せておいてなお、彼女は誇るでもなく、自慢するでもなく、微笑んでいる。こんくらいで褒められるなんて、むしろ恥ずかしいとばかりに。

「普通の吸血鬼なら、大丈夫とはいえないでしょうね」

「そんなに変な動きしてた？」

「この世の動きとは思えないほどね」

「でも、私は普通の吸血鬼だよ」

フランが普通だったら、他はどうなってしまったのだ、と叫びたかったが、止めた。代わりにため息をつく。

いったい彼女は、どれほどの実力を持っているのだろうか。長い付き合いだが、彼女が本気を出したところを見たことがない。隠しているのだ、とレミイは言っていた。だから、幻想郷で思う存分発揮してもらいたい、姉の老婆心には頭が下がるばかりだ。

だから、フランが本を借りに来た、と言ったとき、私は好機だと思った。好奇心を満たす好機だ。彼女の実力を試すことができるかもしれない。

私の周りにも当然罫が張ってある。が、それに加えて、加護の魔法をかけた。私のそばによると、絶対に壊れない壁が出現するというものだ。

きっと彼女であれば、こんな壁を壊すのはたやすいだろう。その力を使い、どのように壁を壊すのか、観察したかった。

「もし本を借りたいのだったら」「だったら？」

「私の帽子を脱がせてみなさい」

そのために、私の周りの壁を壊して見せなさい。内心でそう続ける。が、どうやらフランは私の思惑に気がついたのだろう。口を膨らませ、悲しそうな顔をした。

どうやら彼女は本を借りるのは諦めるようだった。残念だが、仕方が無い。力を見せることに比べれば、本を借りれないことぐらい我慢する、と決めたのだろう。正しい判断だ。

いくら身内であっても、本当の力は隠す。圧倒的な強者というのはそういうものだ。

その後、今回のレミイの計画した引越し計画について、彼女は私に尋ねてきた。どうやら、知らされていないらしい。

だが、流石と言ったところか、薄々感づいていたようで、少し話をするだけで、すぐにことの本質を見抜いたようだった。

分からないの？ と質問すると、「お姉ちゃんの身勝手さ？」と返してくるあたり、なかなか皮肉が効いている。

「楽しみだなあ」

一通り話し終わった後で、彼女は突然そういった。目をキラキラと輝かせ、夢見る少女のように手を組んでいた。

「楽しみなの？」

私は思わず聞き返してしまう。見知らぬ土地にいきなり移動するのだ。困惑するのが当然に思えた。

「私は全然楽しみじゃないのだけれど」

えー、と口を尖らせた彼女は、ロマンだよロマン、と愉快そうに笑った。

「想像してみてよ。世界が動くんだよ。みんなちっぽけに見えてさ。私は何もしてないのに景色が変わるんだよ？ 楽しいに決まってるよ」

ぞつとした。これが世界を統べるものなのか、と感動すらした。

幻想郷という平和ボケした世界を、私たちが動かす。所詮、そこにいるちっぽけな妖怪たちなんぞ、何もせずともひれ伏す、とそう言いたいのだろう。

なるほど、確かにロマンだ。だが、それはあまりにも獯猛で、狂っている。

衝撃を受けた私は、そうなのね、とかろうじて返事をする事しかできなかった。

「パチュリーはインドア派だからね。たまには外に出たらどう？」

そんな私に向かい、休む間もなく彼女は言葉を投げかけてくる。無視してもよかったが、さすがに失礼だろう。だが、何も考えることができない。

「いつも部屋にこもっているあなたに言われたくないわね」

「こもってないよ。大人しくしろって言われてるから、しぶしぶね」

「引きこもりってやつね」

だからだろうか。いつもの自分では考えられないほど陳腐な駄洒落を口にしてしまった

羞恥で顔が熱くなっていく。ニヤニヤと笑い、こちらを見る彼女の姿が目に入った。

「パチユリーが恥ずかしがる姿なんて、久しぶりに見たよ」

「見ないで。忘れて」

「忘れてほしかったら」

胸がバクバクと音を立てる。恥ずかしさのあまり、頭がどうにかなりそうだった。そんな私に向かい、フランはとても楽しそうに体を伸ばした。

それが、どこか神々しく見え、私は思わず彼女を凝視してしまう。

「本を貸してよね」

彼女の言った言葉の意味が分からず、一瞬固まってしまった。だが、自分の手元に目を落としたとき、ようやく合点がいった。

いつの間にか、私の手には帽子が握られていた。きつと、恥ずかしさのあまり、それで顔を覆っていたのだろう。無意識のうちに、とっていたのだ。全く気がつかなかった。

もしかして彼女は、最初からそれを狙ったのだろうか。思考誘導というものがある。相手を焦らせ、感情を揺らすことで、正常な判断をできなくし、きつかけを与えて思い通りに操るといったものだ。

私に対し、恐ろしい口マンを口にし、羞恥心をかき立て、それで帽子を自らの手で脱がせるように、仕向けたのだろうか。普通に考えればあり得ない。だが、彼女は普通じゃなかった。

帽子を脱がせてみせたら、本を貸すと約束した時点から、そう考えていたに違いない。

そうだ。それでこそフランドール・スカーレットだ。さすがだな、と彼女を見つめる。屈託で、邪気のなさそうに見える彼女の口から、キラリと光る牙が見えた。